

# わが園に 梅の花散る ひさかたの

## 天より雪の 流れ来るかも

大伴旅人(巻五・八二二)

旅人は現存する日本最古の漢詩集『風藻』にも、「梅雪残岸二乱レ」(梅の花にまがう雪は岸辺に乱れ降り)と表現した詩を残しています。

4月1日に発表された新元号「令和」は、ご存じのとおり「万葉集」の梅花歌三十二首(巻五・八一五〜八四六番歌)の序文に由来します。

「梅花歌三十二首」は、730(天平2)年正月13日に、当時大宰帥(大宰府の長官)であった大伴旅人の邸宅で催された宴において詠まれた短歌群で、それらの前に置かれた漢文が「序」です。そこには、良い季節を迎えて白梅が美しく咲き、良い香りを漂わしている。心地よく酒を酌み交わしながらそれぞれが満ち足りているこの心境は、詩歌でなければとても言い表

やまと  
万葉がたり

すことなどできない。中国でも多くの落梅の詩篇があるが、我々はこの庭の梅を和歌に詠もうではないか、と参集した人々に和漢折衷の斬新な作歌を呼びかける内容が記されています。

年催した宴の出席者による詩集の序文「蘭亭序」の形式を踏まえ、中国詩文の表現をやまとことばに翻案し、白雪と見まがう白梅の花びらを和歌でご紹介した歌は梅花歌三十二首のうちの一と云えます。

【訳】わが庭に梅の花が散る。天涯の果てから雪が流れ来るよ。

大陸文化の玄関口であった大宰府で、当時珍しかった外来植物の梅を主題に開かれた新しい文化を創造する宴が目につかびます。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 次回回は24日

# 燕つばめ来る 時になりぬと

## 雁かりがねは 本郷くに思しのひつつ 雲がく隠り鳴く

（大伴家持 卷十九・四一四四）

今年もまたツバメが巣を造る季節になりました。日差しが暖かさを増しすがすがしい風が吹いてくると、愛らしいツバメの姿を見かけるようになります。ツバメの巣は人間の住居に営まれる場合が多く、軒下などの毎年決まった場所に営巣

するとという話をよく聞きます。クモやハチの巣などはあまり歓迎されず撤去されることも多いですが、ツバメの巣はむしろ歓迎される場合が多いようです。穀物を食べる害虫を食べてくれる益鳥だからとか、営巣された家は人が多く出入りし栄えている証

### やまと 万葉がたり

拠だから、などともいわれず。ツバメの巣といえは中華料理の高級食材のイメーシもありますが、日本に飛来するツバメたちの巣は主に泥と枯れ草でできており、食用にはなりません。高級食材としてのツバメの巣とはアナツバメ類の巣であり、そ

の主成分はアナツバメの唾液腺の分泌物だからです。この歌は、意外にも「万葉集」で唯一ツバメが詠み込まれた歌です。現代と同様に身近な鳥だったと考えられますが、身近なものとはなっていません。 【訳】燕が来る季節になったと、雁は本国をしのびつつ雲の中に鳴いている。

この歌は750(天平勝宝2)年に、当時越中国に赴任して丸4年が過ぎようとしていた大伴家持が詠んだ歌です。雲の中に隠れて姿は見えないけれども聞こえてくる北へ帰るガンの鳴き声を、本国をしのんで悲しげに鳴いていると感じたようです。自らの望郷の思いを重ねていたとみられます。 (県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 次回回は5月15日